

袁中郎小伝

序

明末の袁中郎（一五六八—一六一〇）は、前後七子の復古主義に對抗し、文学は己の心の中から流露したものでなければならぬと主張したことで知られる。彼の兄である宗道（一五六〇—一六〇〇）字は伯修）、そして弟の中道（一五七〇—一六二三）字は小修）とともに三袁と称される。

これまで、袁中郎の文学・思想についての研究は数多く発表されてきたし、中郎のある時期について詳しく検討した論文もあるが、彼の生涯を辿って、思想や文学の変化を追求したものは見当らない。

彼の一生は、おおまかにいえば、三度の出仕と三度の隠棲の繰り返し。

棟方 徳

返しであると言つてよいだろう。出仕を決意し、また隠棲を決意することは、人生の大きな転換である。その転換期には、おそらくは彼自身の主張に、ある程度の変化が伴っていたと思われる。

本論では、袁中郎の人生の岐路における判断を確認し、彼の思想的あるいは文学的主張がどのように変化し形成されていったのかを探ってみたい。

一 袁中郎の家系

袁中郎の祖先は、もともと江右（長江下流）から、蕪（湖北省蕪春県）・黄（湖北省黄冈県）という土地に移り、のちに洪武年間（一三六八—一三九八）に兵卒となって公安（湖北省公安県）に屯田した。曾祖父の暎は任侠をもって聞こえ、祖父の大化も、また氣

概のある人物で、嘉靖二十三・四年（一五四四・一五四五）の二年にわたる公安の大飢饉に際し、千金と穀物を捐じ、借用証を焼き捨てたという。その子の士瑜、つまり袁中郎の父には、曾祖父や祖父のような義侠を示す逸話は伝わらず、十五歳で秀才に合格し、一生を諸生で終えた。士瑜は、河南左布政使を勤めたことのある龔大器の娘を娶り、二人の間に、兄の伯修、中郎そして弟の中道が生まれた。袁氏の家系は士瑜の代から、武より文に転じたようである。彼ら三兄弟が生まれた公安は、洞庭湖の西北に位置し、長江を臨む鄙びた地であった。公安の名は、遠く既に三国時代に命名されたが、袁中郎が現れるまで、この地は著名な人物を生み出さなかった。中郎自身も、

邑は漢唐自り、来た文士無し。故に旧時略すこと多し。（聖母塔院疏）

あるいは、
余が邑、文を能くせずして文を言うことを恥ず。最も悪習為り。（叙高氏家集）
と言い、この地の文風盛んならざることを嘆いている。また、公安の窮乏ぶりを次のようにも語る。

公安は弾丸の地、飢兇号召す。力を備ひ、及び春を賃って幾くばくか寒燥を経歴す。（麗陽駅題壁）

このように、貧しく文化の立ち遅れた地に、突如として袁氏三兄弟が現れたのである。

二 幼年期

袁中郎は、明の隆慶二年（一五六八）十二月六日、湖北省公安県に生まれた。兄の伯修は九歳であった。姉もいたが、彼女はおそらく五歳前後であったと思われる。弟の小修が生まれたのは、隆慶四年（一五七〇）、中郎が三歳の時であった。

中郎は幼い時から聡明だったようで、次のような逸話がのこされている。

年四歳、新履を著く。舅の龔孝廉呼びて之に謂ひて曰はく「足下雲を生ず」と。先生即ち声に応じて曰はく「頭上天を頂くと。孝廉大いに駭く。（袁中道 吏部驗封司郎中中郎先生状）

また、この文に続いて、次のような記載もある。
郷校に入り、年方に十五・六にして、即ち文社を城南に結び、自ら社長と為る。社友の年三十以下の者、皆、之を師とし、其の約束を奉じて敢えて犯さず。時に卒業より外、声歌古文詞を為り、已に集ありて帙を成す。

文中に「時に卒業より外」とあるところからすると、この「社」

は、主に八股文を学ぶための「社」であったようだ。それにしても、自分より年長の者が師と仰ぎ、彼の定めた決まりを守り、八股文のほか、詩文にも通じており、既に詩文集ができていたというのであるから、その聡明さと親分肌の氣質が想像できる。この氣質は、あるいは曾祖父や祖父から受け継いだものかもしれない。

三 青年期

万曆十六年（一五八八）、中郎は二十一歳で郷試に合格する。主考官の馮琦（一五五八—一六〇三 字は卓庵）は、中郎の文を見て、「周秦の間に出入す。急ぎて之を抜」いたという。とすると、この頃の中郎の文は、まだ古文辞派の風格から脱してはいなかったものと思われる。

万曆十七年（一五八九）、彼は会試受験のため、北京に赴くが落第してしまう。しかし、そこで、翰林院編修の任に着いていた兄伯修から、所謂「性命の学」を聞く。この「性命の学」というのは、陽明学の用語で、社会の中で自己の本来的あり方を探求するという学問である。この時を契機として、中郎は一生この学を追求して行くことになり、これ以降、彼の文学理論の基盤ともなるのである。

次の年、袁氏兄弟三人は、麻城から公安に出遊していた李卓吾に

そろって会いに行く。彼こそは、中郎にとって「性命の学」のよき老師であった。

この出逢いによって、中郎の詩文に大きな変化があらわれる。「清新輕俊」と評される彼独自の作風が確立されるのである。それ以前の彼は、当時の文壇の氣風を受けて模倣的な作品が多く、詩も、唐詩に似通ったものも見受けられる。

小修の「王天根文序」に、次のようなエピソードが見られる。王天根は中郎の詩を好んでいたが、ある人たちが、中郎の詩は唐に似ていないと言う。そこで、王天根は、唐詩の間に中郎の詩を混ぜて、以て諸詞客に示して曰はく、「此の類は何れの代の人の詩か」と。諸詞客曰はく、「上は盛唐、次は亦中晚唐を失はず。」と。是に於いて天根大いに笑ひて曰はく「此れ即ち中郎の詩なり。諸公以て全く唐に肖ざる者と為すなり」と。

また、中郎の友人である江盈科は中郎の『幣篋集』に叙している。君（中郎）、卍角の時、已に詩を能くし、筆を下せば數百言、唐に肖にざる無し。

中郎が子どもであった頃の詩は、唐詩によく似ていたというのである。中郎の初期の詩には多くの樂府が見られるが、彼の唐に似た詩は、多くはこの樂府の中に見出される。

下馬立青梧 馬より下りて青梧に立ち

手提碧珊瑚 手に提ぐ碧珊瑚(青驄馬)

花開花落迴生愁 花開き花落ちて迴かに愁いを生じ

郢樹鄢雲幾度秋 郢樹 鄢雲 幾度かの秋(古荊篇)

君看白雪陽春調 君 看よ白雪陽春の調

千載還推作賦才 千載還って推す賦を作るの才(古荊篇)

これらのように、すぐに唐代のある詩を思い浮かばされるものや、少々使い古された典故を用いたものがある。樂府以外でも、

名豈儒冠誤 名は豈に儒冠もて誤らんや

病因濁酒痊 病は濁酒に因って痊ゆ

というような杜甫の「旅夜書懷」を利用した、というよりは剽窃に近い句も見られる。

確かに、初期の中郎の詩は、このように明代の擬古派の影響を受けているし、彼自らも唐に似ている詩があることを認めている。しかし、それは自分の得意とする詩ではないと言う。

公、謂へらく、僕が詩、亦唐人に似たりと。此の言極めて是なり。然れども、之を要するに、幼于が取る所の者は、皆僕が唐に似れるの詩にして僕が得意の詩に非ざるなり。(尺牘 張幼于)

これは、後に彼が、彼独自の文学論を確立した時の言葉である。思うに、後の彼の古文辞派に対する鋭い批判は、若い頃に、こうした模範的詩を作った一時期があったからこそ生み出されたものだろう。もともと、批判というものは、その対象についての深い認識があり、その対象にのめり込みそうになるまで踏み込み、もがき抗ったのちに抜け出してこそ、その激しさを増すものであろうから。

万曆二十年(一五九二)中郎は二十五歳で進士に及第したのち、兄の伯修とともに休暇を願い出て公安に帰る。この時期の彼の詩を見ても、唐の孟郊のような喜びや、官吏となってからの意気込みや抱負を詠う詩は見つからない。逆に、まるで引退したあとの官吏でもあるかのように、悠々自適の生活を謳歌しているかのようである。当時の彼の様子は、次の詩を読めばおおよそ想像できるだろう。

归来 归来

归来兄弟对門居 归来 兄弟 門に対して居す

石浦川辺小結廬 石浦川辺 小さく廬を結ぶ

可比維摩方丈地 維摩方丈の地に比す可く

不妨楊子一休書 妨げず 楊子一休の書

蔬園有処皆添甲 蔬園 有る処 皆甲を添へ

花雨無多亦溜渠 花雨 多きこと無きも亦渠に溜まる

野服科頭常聚首 野服 科頭 常に首を聚め

阮家礼法向來疎 阮家の礼法 向來疎なり

尾聯の二句は、母方の父やおじたちと共に禪を語り、詩を賦して
楽しみとした事を言う。このように、官途に汲々とせぬ彼であるか
らこそ、一たび呉の県令となって間もなく、その仕事の煩わしさに
悩むのである。

四 県令期

万曆二十二年（一五九四）十二月、中郎は呉県の県令に任命され、
翌二十三年春に着任し、およそ二年間呉県で過ごすことになる。

呉県での役人生活は、彼にとって決して過ごしやすいものではな
かった。着任後、友人たちに送った手紙の中に、その辛さを述べた
ものが多い。

着任してはば一年が経ったころ、辞職を願い出ている。

万曆二十五年（一五九七）二月、ついに辞職が許され、さっそく
念願であった江南の旅に出かける。杭州、蕭山、紹興、諸暨、黄山、
富春江などに遊び、多くの詩や遊記を書いた。呉県での煩雑な仕事
から解き放たれた喜びからか、その詩文はのびやかで明るい。特に、
杭州の西湖での作は開放感に満ちあふれている。

五 在京期

万曆二十六年（一五九八年）中郎が三十一歳の時、彼は真州（儀
徴）に滞在していたが、北京に居る兄の伯修から、上京するように
との連絡を受け、上京後、直ちに順天府教授を授かる。県令期に、
あれほど官吏になることを嫌悪していたにも関わらず、県令を罷め
て一年足らずで、再び官吏の途に就くというのは、あまりにも速い
変化ではなからうかと思われるが、彼自身はこのように述べる。

計窮し、囊尽くるに及んで、策の以て糊口す可き無ければ、則
ち又風塵に奔走し教学先生を求む。（答朱虞言司理）

官を去って各地に遊んだが、その為に口過ぎすることもできなく
なったので教職に就いたというのである。

以前、中郎は、「知県は論ずる無く作さず。郎は教官も亦作すを
願わず。」とまで言っていたが、これは当時、つらい役職のまった

だ中にいたので、ついこのような言葉を吐いたのであろう。ついでに中郎を弁護すると、彼が県令であった時の手紙には、確かに「県令」となるのはつらく苦しい、しかも「呉令」となるのは最もつらいとしばしば言っているが、官吏そのものがいやだとは、はっきり言っていない。隠棲の意志は時にみせるが、それはまだ強い言葉ではない。県令を罷めて間もなくの転出も、さほどの矛盾は感じられない。

さて、彼の補せられた順天府教授という役職はどのようなものかというと、

教官の職は甚だ称い易し。弟（中郎）の拙懶と最も宜し。毎月旦望に、大京兆に向いて一揖し、即ち煩劇事と称し、帰れば則ち門を閉じて書を読む。蹄輪の声、浹旬にして一たび之有り。

近ごろ頗る一・二の相知の快語を得可き者有り。又、衙齋城の東北の湖水と近く、大利多し。薊酒、貴しと雖も時に亦餉せらる者有り。この数事を観れば、弟の情景、豈呉令に百倍ならざらんや。（答呉敦之司理）

というように、読書したり、近くの湖や寺院に行く時間的余裕もある閑職といってもよい仕事で、県令と較べると何倍も気に入っていたようである。特に読書に打ち込めることは、よほど嬉しかったようだ。

僕、近日尊経閣に坐し、弟子と時芸を談じ、楽しみ亦減せず。閣中に廿一史、十三経及び他書有りて甚だ多し。窮官、必ずしも書を買わず。是れ第一の快活の事なり。（答梅客生）

この時期、注目すべきは、再び結社の活動を開始したことである。社名は、崇国寺の葡萄林にちなんで「葡萄社」とした。彼は、十五・六歳の時、そして進士となって帰郷した時の二度、「社」を組織していたが、以前までの「社」は、公安という辺鄙な地域の、いわば限られた社会のなかでの活動であった。しかも、最初の「社」は、八股文修得を主な目的とするもので、純粹な詩社とは呼べないものであった。しかし、今回の葡萄社は詩社であり、その場所は首都北京の崇国寺である。参加した者は、潘詩藻、劉昇、黄輝、陶望齡、顧天峻、李騰芳、呉用先、蘇惟霖といった進士出身者が中心となっており、当時の文壇におけるこの詩社の持つ影響力は、以前の公安での「社」とは比較にならなかつた。おそらく彼は、この詩社の中で行われた会合で、自らの新しい文学論を展開し、その参加者たちにも大きな衝撃を与えたに違いない。

六 隠棲期

中郎はその後、国子監助教に遷り、礼部儀制司主事に補せられた。

しかし、上京後一年あまり経った頃の、手紙を見ると、しばしば南方の山水や友人達を懐かしみ南に帰る意志を示した言葉が現れる。手紙の内容からすると、北国の寒さが厳しいこと、国事の紛々としてゐることが、それらの言葉を吐かせた要因であろうが、彼に帰郷を促せた直接的原因是、葡萄社と時の宰相である沈四明（一貫）との間に摩擦が生じたことにある。

万曆二十八年（一六〇〇）十二月、故郷に帰っていた彼は、突然、兄伯修の訃報に接する。伯修は、中郎の幼い頃からの思想的指導者であり、詩友であり、敬愛してやまぬ人物であった。兄の死は、彼にとって大きな衝撃であり、これが中郎の隱棲へのを決定的にした。出仕の意をなくした彼は、公安の城南に三百畝の低地を買って堤を築き柳を植え、そこに柳浪湖と名づけた。これからいよいよこの地で、六年に及ぶ隱棲生活を始める。

彼はここでの生活を次のように述べる。

柳浪館に客居して、曉に起きて水光緑疇を看、頓に櫛沐を忘る。
晨供の後、稚川の諸間人を率いて杖いて村落に入り、日晡、小舟に棹して一橈を以て水を劃す。多く載すれども三人に過ぎず。晩には則ち書を読むこと一・二刻を尽くし、諸納を聚めて十法界の譜を擲ち、負金を斂めて放生し、暇あれば即ち韻を拈して題を賦し、率爾に倡和して声律に拘わらず。（尺牘 龔惟学先

生）

朝には住まいである柳浪館を囲む風景を眺め、昼には友人と舟で遊び、夜には書を読んだり詩を作ったりといった日が続くのである。こうした生活は彼の詩の中にも見出せる。次の詩を読むと、静かで落ち着いた日々のようなすが目に見えるようである。

柳浪湖雜詠

柳浪湖雜詠

仮寐日高春

仮寐 日高く春き

青山落枕中

青山 枕中に落つ

水含蒼蘚色

水は含む蒼蘚の色

窗滿碧疇風

窗は滿つ碧疇の風

適性宮花石

性に適ひて花石を宮み

書方去鳥虫

方を書して鳥虫を去る

酒人多道侶

酒人 道侶多く

醉裏也談空

醉裏に也た空を談ず

尾聯の「道侶」は道教の所謂「道士」ではなく、仏教の僧侶のことである。この時期の詩の中には、少なからぬ「僧」の字が見える。

僧來時復帶雲還（柳浪館 其一）

不知僧在那溪灣（同 其二）

僧静能消月（柳浪館月中泛舟）

見僧詢貫字（柳浪雜詠 其三）

等々。「僧」の他、「涅槃」「禅心」「維摩」などの仏教用語もしばしば見え、僧侶に贈った詩や、寺院を訪れた詩も多い。このような穏やかな生活の中で、多くの僧侶と交わり、より仏教についての関心も深めていた。彼は、すでに万曆二十七年に『西方合論』¹でその浄土観についてまとめているが、仏教への一層の傾倒は、これらの詩を見るだけでも確かめられる。

もう一つ、この時期の詩を読んで気が付くのは、蘇東坡の詩に和した詩や、彼を懐う詩が目立つことである。今、その詩題だけを挙げると、

赤壁懷子瞻

花朝和坡公韻

和東坡梅花韻、今年雪多、梅開不堪暢、為花解嘲、復以自解云耳、同惟長先生作。

和東坡聚星堂韻

また、詩句では、

欲把無塩比西子 老髯時後立春風（柳）

周郎事業坡公賦 遞与黃州作主人（過赤壁）

慎勿誇張竿水過 若他桑孔算魚蠶（自注 末句見坡公漁蠶詩）

（新買得画舫、將以為菴、田作舟居詩 其五）

といった、蘇東坡を意識したものも見られる。中郎が特に蘇東坡を好んでいたことは、既に彼が北京で任官していた時期にも、李卓吾への手紙の中で、「蘇公が詩、高古老杜に如かず。而れども超脱変怪は之に過ぐ。天地有りてより来た一人のみ（中略）蘇は詩の神なり」（尺牘 与李龍湖）と、自ら表明している。しかし、彼が蘇東坡に和した詩は、柳浪湖に隱棲していた時期に集中し、この時期に到ってはじめて蘇東坡に特別な関心を示すのである。既に出仕の意なく、淡々とした生活に憧れていた中郎が、軽快で、時に澄明な心情を述べる作風の蘇東坡に同種の感覚を持っていたであろうことは充分考えられる。蘇東坡を好み始めるといふこの変化は、益々穩実になって行く中郎の思想の変化が窺われる。また、この時期に書かれた「絛高氏家繩集」の中に現れる「淡」といふ意境とも関わりがあらう。蘇東坡も袁中郎同様、熱心な仏教の信者であったことも、二人の共通する点の一つである。さらに想像を逞しくすれば、蘇東坡に関心を持った直接の理由は兄伯修の死にあるかもしれない。伯修は、自分の書齋に「白蘇齋」（白居易と蘇東坡）と名づけるほど蘇東坡に傾倒していた。その兄の死を契機に兄の好んでいた蘇詩を、弟の中郎が改めて読み直し、更にその関心を深めたとも考えられる。

但し、中郎は、他の詩人より蘇東坡がすぐれていると言っているわけではない。確かに、中郎には「韓柳元白欧は詩の聖なり。蘇は詩の神なり」(尺牘 李龍湖)と言つて、その神妙な点を高く評価もし、「故に直なり千古に卓絶すること」(尺牘 答梅客生開府)と大いに東坡を誉め称えもするが、この同じ尺牘の中で、

其の道、杜に如かず。逸、李に如かざるに至っては、此れ自ら氣運の然らしむるなり。才の過に非ざるなり。

と、はっきり蘇東坡にも、李白・杜甫に及ばない点があることを認めている。

そもそも、「心を師とし」自己の心の中から湧き起こった情を、個性豊かに唱いあげてを宗とした中郎が、ある特定の詩人に、はなはだしく私淑するとは思えない。彼は、司馬遷、班固、陶潜、李白、杜甫、そして歐陽修、蘇東坡それぞれの作風を慕い、それぞれの個性を尊重したまでのことであり、決してそれらを優劣、或いは上下の評価を付ける対象としては見ていないのである。もともと中郎は文学というものは時代に即して変化するものであると認識していた。彼がここに挙げた文人たちも、その時代の変化に応じて、独自の作風を作りあげた者たちである。蘇東坡についても、確かにそのすばらしさには興味を懐いているが、他の詩人と比較して、誰々よりも好いなどとは発言していない。

さて、中郎の柳浪湖での生活は、しばらくは平坦で穏やかな日々が続いたが、万曆三十年(一六〇一)二月、彼の思想面での先生である李卓吾が、突如、獄中で自刎した。中郎は前年、通州に彼を訪れたばかりである。若い頃、終生の師匠と認めていた李卓吾の訃報は、中郎をいかに悲しませたことか。

ただしこの時期、中郎の弟である袁小修には「李温陵伝」があり、友人である陶望齡には李卓吾の死を悼む「祭李卓吾先生文」などがあるが、今伝わる中郎の全集には、何故か李卓吾の死に直接言及する彼の詩文は見出せない。当時、犯罪者として捕らえられていた李卓吾のことを言うのを憚ったためか、或いは李卓吾との思想的決別をしていたためかは、判然としない。この点は、今後改めて探求していきたい。

続いて十月、祖母の詹氏が病で死去する。中郎は幼い時、母を亡くしていたので、この祖母の手で育てられた。彼にとっては、母を亡くしたかのような悲しみであつたらう。

万曆三十二年(一六〇四)秋、中郎は徳山の塔院に避暑に向かう。そして塔院の裏の樹下で、儒・老・道・禅について僧侶を交えた諸友と語り合う。その問答を梓に付したのが『徳山暑譚』である。これは中郎の思想を知る重要な資料であるが、後に彼が黄平倩に与えた手紙の中に、「弟(中郎)、徳山に入りて自り後、学問は乃ち穩妥

なり」と言っていることから、彼の仏教に関する学問が益々進み、より穩実になったことがわかる。

彼の隱棲生活最後の年に書かれた手紙に次のような言葉が見える。

若し山に帰りて六年反復研究して真賊の在る所を尋ぬるに非ざれば、亦、將に忌み憚ること無きの小人に為らんとす。(尺牘

答陶周望)

この六年にわたる自己修養がなかったならば、独善的な小人になっていたろうと言うのである。この隱棲生活は、彼にとって充分意義のあったことが窺われる。

しかし、彼はいつまでもこのような安逸な生活をしているわけにはいかなかった。再度役人生活を強いられることになる。

七 再出仕期

万曆三十四年(一六〇六)、中郎は再び北京に入り、礼部儀制主事に任ぜられた。今回の出仕は父の嚴命によるものだったようである。弟である小修の「中郎先生行状」には「大人(父士瑜)亦、一たび出づるを冀ふ」とあり、友人潘茂碩に与えた尺牘に「家大人、弟に迫ること甚だし。秋に入って当に強顔して一たび出づるべし」と書き、蘇潜夫への尺牘には「弟、此の一条の懶筋、真に抜き難し。

大人頼りに以て言を為す。」とある。しかし、今回は確かに迫られての出仕ではあるが、中郎の六年に及ぶ修養は、「出ず出でざるは何ぞ心身に関はらん」(尺牘 答劉雲嶠祭酒)とまでいわせるほどの成果を得ている。

今回の北京は、以前の在京生活とは比較にならぬほど寂寞としたものだった。当時、共に学問や詩を論じあっていた兄伯修や中郎の文学論の同調者であった江盈科は既にこの世の人ではなく、その他の友人たちも、七年を経て各地に散り散りになり、葡萄社での盛會を再現することはできなくなっていた。彼は当時の盛況ぶりを偲んで、幾人かの友を引き連れて崇国寺に遊ぶが、隔世の感を懐き、寂しさを増すばかりであった。

遊崇国寺 得明字 崇国寺に遊ぶ 明字を得たり

入寺稀人識 寺に入れば人の識る稀なり

僧雛尽老成 僧雛 尽く老成

花猶香廢苑 花は猶ほ廢苑に香しく

石莫話前生 石は前生を話す莫し

壁上苔棲墨 壁上 苔 墨を棲まわせ

廊間雨壞楹 廊間 雨 楹を壞る

春衣能幾日 春衣 能く幾日ぞ

又復過清明 又復た清明を過ぐ

詩の題目は、友人たちと共に崇国寺を訪れて、「明」の字を含む下平声の「庚」の韻を引き当てたという意味。

寂れた寺院には訪れる人もなく、かつて知り合いだった僧侶はすでに老人となっており、友人たちと遊んだ苑は荒れはてていた。ただ、時の過ぎゆくことを嘆くばかりである。

万曆三十五年（一六〇七）には、妻の李氏にも先立たれ、彼の寂寞は増すばかりであった。

舟中除夕憶李安人 舟中除夕 李安人を憶ふ

客裏逢除夕 客裏 除夕に逢ふ

灯前少故人 灯前 故人を少く

乍如雲没海 乍ち雲の海に没するが如く

忽以影離身 忽ち影の身を離るるに似たり

滿褶衣衫淚 滿褶 衣衫の涙

半年河渚塵 半年 河渚の塵

井枯泉脈在 井 枯れて泉脈在り

棟老燕巢新 棟 老ひて燕巢新たなり

翌、万曆年三十六年（一六〇八）、吏部驗封司主事に任命される

が、いくら昇進しても、都には「性命の学」を語る友もなく、思想は「禅」に傾くばかりである。毎年の誕生日に作っていた詩も、この年は作らなかつた。

万曆三十七年（一六〇九）には、陝西省の郷試の主考官として長安に赴き、その足で華山、嵩山、驪山に遊ぶ。山水を遊歴するのが好きな中郎は、ここでも多くの遊記を作るが、若い頃の体力はなくなっていたようである。小修の「硯北樓記」に、「（中郎は）中年以後、血氣漸く衰ふ。（中略）山水に適ふと雖も跋涉するは苦し」とある。この時、中郎はまだ四十代の前半である。多くの人の死を目の当たりにし、仕事による疲労が彼の体力を消耗させていたのである。

この年には、若い頃、ともに洞庭湖や西湖に遊んだ親しい友であり、中郎の文学理論のよき理解者でもある陶望齡（？—一六〇九）をも亡くしている。

八 再隱棲期

万曆三十八年（一六一〇）、彼は更に昇進して史部稽勳郎中となったが、その後休養のため、同年三月、再び公安に帰る。ただ、以前

の住まいは水害に遭い、住むには適さなくなっていたので、長江対岸の沙市に移り、建物を買って「硯北樓」と名づけた。

この時、の中郎の心境は、先ほど挙げた、弟小修の作である「硯北樓記」の中に表れている。

今より後は、將に万巻を此の樓に聚めんとす。蠹魚と作り、游戲して躑を題し、興の到る所、時に復た數語を揮灑して、以て性靈を踈淪し、而して此の硯北の身を悦ばしめば、吾が志畢り、吾が計定まりぬ。

彼の歳からは考えられないほどの消極的な発言である。これは中郎の没した後書かれた文ではないにもかかわらず、「吾が志畢り、吾が計定まりぬ。」とは、まるで間近に迫った死を予感したかのような言葉である。

さて、中郎の文学主張は、晩年になって「修正期」に入るとしばしば言われているし、実際、彼の晩年の詩には、若い時ほどの多くの口語的表現は見られないし、遊記も軽妙洒脱とは言えないような、理屈っぽい長い文も見られる。しかし、この文にある「性靈」の語、そしてこの四年前に書かれた「雷太史詩序」の中に使用されている「真」の語からすると、中郎の若い頃に主張された文学論は、基本的には大きな変化はないように思う。彼自身の作品の変化と彼の文学理論とは区別して考えてよい。

沙市に新居を構えたこの年の八月、中郎は急に発病し、九月六日に家族に看取られてこの世を去った。その病状の経過は弟小修の「中郎先生行状」に詳しい。享年四十三であった。

結語

袁中郎の詩文は、「清新輕俊」あるいは「輕妙清俊」と評される。若い頃、李卓吾を知ってからの詩文は、これらの評語に相応しく、明るく輕妙である。特に西湖での遊記は、風景そのものに生命を与えているかのように生き生きと描かれており、人物描写もユーモアに溢れている。この時期の文学的主張の中には、しばしば過激で積極的な発言も見られる。

その後、北京での任官を経て隱棲するに及んで、參禪し僧侶たちと交流することが多くなる。その中で、仏教への関心も深まり思想は穩実になった。このことから、中郎の思想には、転向があったとよく言われる。確かに中郎の遊記の文体は時代を経るにしたがって変化が見られるし、彼自身よく自分の詩文は「腕に信せ口に信す」のみで、他人が自分の真似をしてはいけないと他人に忠告している。但し、中郎の詩文に見られる大胆な表現は、唐詩を踏襲する前後七子に対抗するためであって、「真似をしてはいけない」という

発言は決して自分の過去の主張を否定するものではない。彼の晩年の発言から察するに、若い頃の彼の主張は基本的には大きく変化しなかったのだろう。

注

(1) 内山知也「蘇州時代の袁中郎」一九八六年三月 筑波中国文学論叢(『明代文人論』一九八六年十一月十五日 木耳社所収)

(2) 中郎がいかに県令という仕事を嫌悪していたかは、内山知也の前掲論文に詳しい。

(3) 中郎の西湖での遊記については、拙論「袁中郎の遊記について—蘇州・杭州の時期を中心に—」(一九九三年三月 二松学舎大学大学院紀要「二松」第七集)参照。

(4) 『西方合論』は明暦元年刊の和刻本がある。袁中郎の詩文は山本北山らの推奨もあって早くからわが国で親しまれていたが、仏教に関しての彼の作も江戸の初期から既に読まれていたことがわかる。

(5) 中郎の母が死亡した時の、彼の年齢については四つの説がある。

一、七歳 袁伯修「送龔鴻臚吉亭母舅」

二、六歳 袁中郎「詹大姑墳記」

三、八歳 袁中郎「余大家柩葬墓石記」

袁小修「中郎先生行状」

袁小修「祭李母尚太孺人文」

四、四歳 袁中郎「去吳七牘乞帰稿」

任訪秋は『袁中郎研究』(一九八三年九月 上海古籍出版社)の年譜で八歳説をとる。その理由として、中郎の文中では乙亥(一五七五年)という年を明記しており、小修の二つの文の記載とも合致している点を挙げる。入矢義高の『袁宏道』(一九六三年七月 岩波書店)の年譜もまた八歳説をとる。袁乃玲氏の『袁中郎研究』(一九八一年五月 台湾学海出版社)では、「伯修が最も年上であり、その記憶も最も信ずべきである」と注記してある。とすれば七歳説であるが、本文では「六歳」と記している。おそらくは「七歳」の誤記だろう。

(6) 『徳山暑譚』は、中郎の死後に刊行された『珊瑚林』の一部。『珊瑚林』(二〇〇一年三月 荒木見悟監修 ペリかん社)に訳と注釈がある。